

平成22年度文部科学省委託事業「青少年体験活動総合プラン」  
企画事業「ボランティア・自然体験活動補助指導者養成セミナー」  
**「やる気！元気！ボランティア」**

- ◆期 日 平成22年 6月25日（金）～ 6月27日（月）【2泊3日】
- ◆会 場 国立能登青少年交流の家
- ◆対 象 高校生・専門学校生・大学生・社会人 30名
- ◆参加者 57名（大学生50名，社会人7名）
- ◆講 師 宗倉 啓（福井大学教授）  
齊藤 一彦（金沢大学准教授）  
茂尾 亜紀（石川県社会福祉協議会ボランティアセンター主任主事）  
羽咋消防署  
金沢海上保安部  
国立能登青少年交流の家企画指導専門職
- ◆主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立能登青少年交流の家
- ◆後 援 新潟・富山・石川・福井・滋賀各県教育委員会

## 1 趣 旨

- ・ ボランティア活動に必要な知識や技能の向上を図り，ボランティアとしての資質を高め，広く社会でボランティア活動に取り組める青年を育成する。
- ・ 青少年の自然体験活動を支援する補助指導者（18歳以上）を養成する。

## 2 ねらい

- ・ ボランティアや自然体験活動補助指導者に必要な知識や技能の向上を図る。
- ・ ボランティアや自然体験活動補助指導者としての資質や態度を養う。
- ・ 参加者同士で相互理解を深め，コミュニケーション能力を高める。



講義・演習『ボランティアってなあ～に？』



実習『体験学習法』

### 3 日程

6月25日 (金)	午後	○受付 18:30・開講式 19:00 ○講義・演習「ボランティアってなあ〜に？」 講師：石川県社会福祉協議会ボランティアセンター 茂尾 亜紀 ○交流会
6月26日 (日)	午前	○実習「フレッシュタイム」 指導：交流の家職員 ○実習「体験学習法：メニューはなあ〜に？・人間コピー機」 指導：交流の家職員 ○講義「青少年教育施設の現状と運営」 講師：交流の家所長 ○講義「統計で見る青少年の現状」 講師：交流の家次長
	午後	○実習「自然体験活動の技術：ウォークラリー」 指導：交流の家職員 ○実習「自然体験活動の技術：野外炊飯」 指導：交流の家職員 ○講義「教育課程と体験活動の関連性」 講師：金沢大学准教授 齊藤 一彦
6月27日 (月)	午前	○実習「フレッシュタイム」 指導：交流の家職員 ○実習「学ぼう！いのちの救い方：救命救急法・水難救助法」 講師：羽咋消防署・金沢海上保安部
	午後	○講義「学校教育における体験活動の意義」 講師：福井大学教授 宗倉 啓 ○「広がれ！のとボラのWA！：22年度事業紹介・ボランティア登録」 ○閉講式 15:40

### 4 成果と課題

#### (1) 事前・事後アンケートによる事業評価

事業評価を目的とし、参加者57名を対象に調査を実施した。調査項目は、事業内容に対応した項目を含めた35項目を使用した。

受講前を事前とし、受講後を事後として回答を依頼した。その平均値の比較を図に表したものが、図1である。

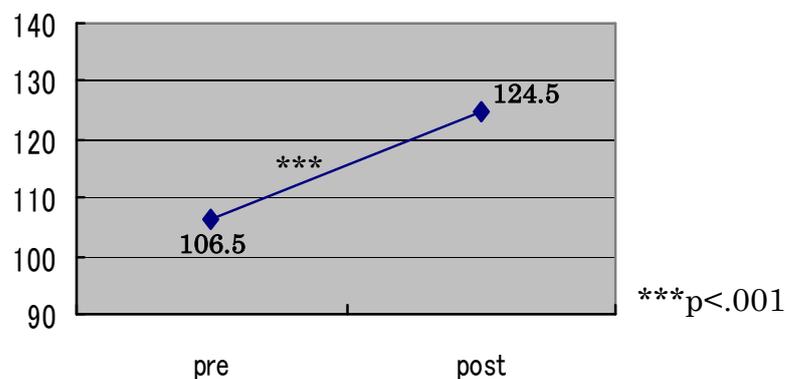


図1 事前事後における平均値の比較（全項目）

図1でも明らかのように、0.1%水準で有意に平均値が事後に向上した。したがって、本事業に参加したことで、参加者に何らかの変容が見られ、平均値が向上したと考えられる。

そこで、具体的に、本事業のどのような要素が参加者に変容をもたらしたのかを調べるために、35項目の調査項目を、本事業のねらいにそって3つのグループ(表1)に分けた。

表1 調査項目のグループ分け

第1グループ:知識や技能	第2グループ:資質や態度
1 環境保護・保全についての知識・技能に自信がある。	2 他者に奉仕することは自分の人生を充実させる。
3 AED(自動体外式除細動器)の使い方を知っている。	4 自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う。
7 レクリエーションの指導をするのが得意である。	6 レクリエーションは楽しいと思う。
8 国立能登青少年交流の家についてよく知っている。	9 新しく身につけた学習成果を様々な場で活用したい。
12 見本を示して分かりやすく解説するのが得意である。	10 相手の立場に立った行動ができる。
15 人工呼吸や心臓マッサージのやり方を知っている。	11 モノづくりは好きである。
16 野外活動についての知識・技能がある。	13 高齢者に対してやさしく接することができる。
17 ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている。	14 ボランティアに取り組むことは生きがいの一つである。
19 青少年の現状と教育の課題について理解している。	18 状況に応じて、正しく判断し、他者を導くことができる。
24 ボランティア活動を取り巻く現代的課題について理解がある。	20 子どもに対して、やさしく接することができる。
28 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である。	21 人の喜びを自分の喜びとして感じるすることができる。
30 海外のボランティア事情について理解がある。	22 自分の知識・技能を他人のために役立てることができる。
31 生涯学習ボランティアについて、よく知っている。	25 ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる。
33 社会福祉についての知識・理解がある。	26 野外で仲間とごはんを食べることは気持ちよいと思う。
第3グループ:コミュニケーション能力	29 ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある。
5 人の意見に耳を傾けることができる。	32 様々な国の人々に親切に接することができる。
23 言葉が分からなくても身振り・手振りでコミュニケーションができる。	34 障害者に対して、やさしく接することができる。
27 人前で自分の意見がはっきり言える。	35 国際的な分野で活動・仕事がしたい。

表1に示したように、第1グループを「ボランティアや自然体験活動指導者に必要な知識や技能」、第2グループを「ボランティアや自然体験活動指導者としての資質や態度」、第3グループを「コミュニケーション能力」と命名した。そして、それぞれのグループにおける平均値を算出し、事前事後で比較した結果を図2に示した。

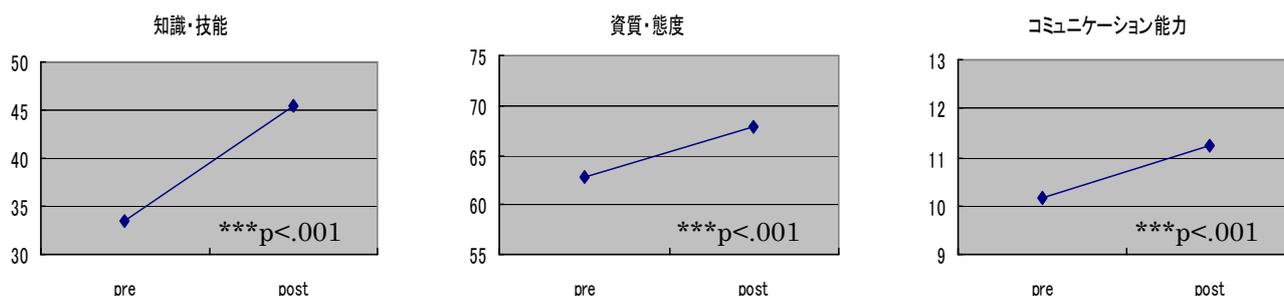


図2 グループごとの平均値比較の結果

図2からも明らかなように、すべてのグループにおいて平均値が向上している。したがって、ボランティアや自然体験活動指導者としての知識・技能、資質・態度、コミュニケーション能力において、本事業が参加者の変容に影響を及ぼした可能性がある。

[参考文献]

国立オリンピック記念青少年総合センター「事業効果測定のための調査法とその利用法」

(2) 成果と課題

《成果》

- ・今年度目標の30名を超える53名が研修会を修了し、「自然体験活動補助指導者」として48名、法人ボランティアとして37名登録することができた。
- ・事前事後アンケートによる事業評価からも明らかなように、本事業のねらいである、「ボランティアや自然体験活動指導者に必要な知識や技能の向上を図る」、「ボランティアや自然体験活動指導者としての資質や態度を養う」、「コミュニケーション能力を高める」について向上したことが分かり、ねらいを概ね達成できたといえる。
- ・企画指導専門職が研修の一部で講師となることによって、専門職としての技術や知識について再確認したり、新しいプログラムを試したりすることができた
- ・講師依頼や学生の参加依頼を通して、周辺大学の教授・准教授とのネットワークを新たに築くことができた。

《課題》

- ・学校等の協力を得ながら、修了者が自然体験活動補助指導者として活躍する場をコーディネートしていかなければならない。
- ・修了者が、この研修をもってすぐに現場で自然体験活動補助指導者として指導に当たるのは難しい。そのため、修了者に対して、スキルアップやフォローアップのための研修を行う必要がある。
- ・本事業で高まったボランティアへの意欲を継続するための手立てを考え、ボランティア企画事業へつながるように定期的な広報活動を工夫する。



実習『学ぼう！いのちの救い方：水難救助法』



実習『自然体験活動の技術：野外炊飯』